



經典餘師

論語四

五

口 11  
2047  
5





門口 2.047  
卷 5

論語朱熹集註  
衛の靈公弟

論語朱熹集註

溪世尊 譯



衛の靈公陳を  
孔子は問孔子對  
て曰はく俎豆之  
事ハ則ち嘗て  
之を聞軍旅之  
事ハ未だ之を學  
ば未明日遂に行  
陳に在りて糧  
を絶從者病能  
興と莫  
子路慍見曰く  
君子も亦窮も

衛靈公第十五

衛靈公問陳於孔子孔子對曰俎豆之  
事則嘗聞之矣軍旅之事未之學也明

日遂行 靈公每道にして仁義を好む禮法の俎豆を

在陳絶糧從者病莫能興 の時

子路慍見曰君子亦有窮乎子曰君

論語朱熹集註



と有乎子曰ま  
君子固より窮  
小人窮れば斯  
と濫ま

賜女予と以て  
多し學んで之  
識と者と為與

對て曰く然非與  
曰まはく非也予  
一以て之と貫ぬく

由徳を  
知者鮮

無為よして治る  
者ハ其舜與夫何  
と為哉己と恭  
ちかして正しく  
南面する而已

子固窮小人窮斯濫矣

子路心慍怒を

奉まつりてやハされ天道ハ悪と云くして善なることと與  
くすと曾てさくさくするに今徳ハ厚と君子もあつた小  
困窮ハゆびさふとハいふなる道理にや御答らるの  
とと迷ふりのさされ天道も時節のめぐり  
たふの變事ありそのさへ過福吉凶ハ天命として運數  
の定まりありさるる操節をさるること困窮にさへ怒と  
りた君子のさるるを心入の淺と小人の輩ハさるる身  
さるるさるる窮も時節のめぐり行なひを濫とこと  
仰せらる味くさる

○子曰賜也女以予為多學而識之者

與 聖人さるるに道ハひろく大なりとさるる校儀一理  
さるる依て子貢ハさるるハ女の心に道とさるる對曰

然非與曰非也予一以貫之

然非與曰非也予一以貫之 曰く誠ハ然  
とハ里仁の篇よりハく是を出さる

○子曰由知徳者鮮矣

己胸中の義理を胸中に積得たるを徳と云ふさるるに  
さるる胸中小たくさるる徳の味を知り鮮とのさるる  
さるる見し時のとさるる

○子曰無為而治者其舜也與夫何

為哉恭己正南面而已矣

何を為りて治る者ハ舜帝と云ふ  
何を為りて治る者ハ舜帝と云ふ  
誠敬を盡し己身を恭しく



子張行かひと向  
子曰まはく言忠信  
行かひ篤敬さ  
ハ壹貉之邦と雖  
行さる言忠  
信不不行さ  
篤敬不不州里  
と雖行さる  
哉

正しうて南面に座し  
爲としりしと身と動  
正しけき合ひ能く  
育しりし能く  
○子張問行子曰言忠信行篤敬雖  
蠻貊之邦行矣言不忠信行不篤敬雖  
州里行乎哉  
子張の問なり行なひ  
御答ゆそ  
忠信く篤く執守バた  
敬として篤く執守バた  
州里の片田舎なり  
於前也在輿則見其倚於衡也夫然後  
行右忠信篤敬の身  
行なひ  
立則見其參  
於前也在輿則見其倚於衡也夫然後  
行右忠信篤敬の身  
行なひ

子張諸と緘と  
書と

馬の軛に倚る如く  
のちハ夷狄蠻貊と  
諸紳  
子張これを  
紳とハ礼服大帯の事なり垂あつて  
端に忘るるめに  
○子張諸と緘と書と

直なる哉史魚  
邦道有ハ矢の  
如く邦道無  
矢の如く  
君子ならず哉  
伯玉邦道有ハ  
則ハ仕邦道無  
きハ則ハ卷て之  
を懷らふ可

○子曰直哉史魚邦有道如矢邦無道  
如矢  
聖人衛の大夫史魚を稱ふる誠正直なる  
吾職を守りて矢の如く邦無道君子哉  
伯玉ハその賢徳大なり自でんと取王人の道  
合ふなり邦無道めきハ出て仕官をさ  
邦有道則仕邦無道則可卷而懷之  
知して世の中濁るとハ懷中ニ卷きしる  
知を出して逢ふ



與言可而して  
之與言不人  
失言不與人  
不亦言と失言ハ不

志士仁人ハ生を求  
めて以て仁を害  
殺して以て仁を  
成と有  
子貢仁を為と  
向子曰まはく工

あつて言はば逢ざるの  
あつて言はば逢ざるの

○子曰可與言而不與之言失人不可與  
言而與之言失言知者不失人亦不失言

○子曰志士仁人無求生以害仁有殺  
身以成仁

○子貢問為仁子曰工欲善其事必先

其事を善せん  
欲を必も先其器  
を利も是邦  
居其大夫之賢者  
小事其士之仁者  
を友とす

顔淵邦を為り  
を問  
夏之時を行ま

殷之輅を乘

利其器居是邦也事其大夫之賢者

友其士之仁者

○顏淵問為邦  
子曰行夏之時

乘殷之輅



周之冕と服

のどく金玉をとりつゝものゝ

服周之冕

頭にいづく冕五品

樂ハ則ハら韶舞

奢侈にしてつゝも懸く  
あつて就中周の冕冠を誠したふとく覺ゆる喪の  
体をもつて華義にして奢を實し中を得るを  
樂ハ則ハら韶舞 樂ハ玉人舜帝の樂して善

樂則韶舞

義を尽して妙なりとて

鄭聲をを放り  
佞人を遠けよ  
鄭聲耳ハ淫なり  
佞人ハ殆

仰らるるの時周やろう聖人か  
己身天下にあづらふに依て孔子顔子  
既に先王の礼樂を  
既酌して詭つとと  
放鄭聲遠佞人鄭聲淫

佞人殆

鄭の國の音ハ正しく淫くなく林示の  
佞人邪心の人ハとふかく

人遠慮を  
無きハ必ら近き  
憂有

○子曰人無遠慮必有近憂

空用の言  
辞ありハ

急ぐ所の所作ハとて置へ千里の遠を  
思慮をバ憂うるに社席の近き小起る

已矣乎吾未見好德

○子曰已矣乎吾未見好德如好色者

を好し色を好む  
如くたる者を見

也 聖人よふ徳を好む人の已矣乎とてやとたん  
そくそく徳を好むと色とのひやくかるのなると

臧文仲ハ其位を

○子曰臧文仲其竊位者與知柳下

竊む者與柳下

惠之賢而不與立也

魯の大夫臧文仲と評し  
位を竊くハその

惠之賢なるを  
知て與立不

小ぢぢにさふたつ若柳下惠が徳をあらふとバ不  
知て挙ぐるハ賢を妬とつゝのたつ

躬自厚

不明の罪ハト

○子曰躬自厚而薄責於人則遠怨

て薄く人を責  
とバ則ハら怨と  
遠

矣 義不義をたつるのハ己身をそくと責さるゆへなり  
躬を厚く責て人をバ











斯民ハ三代之直道を行ふ所以なり

譽べしとのとらへばまづ誠てりて導て徳をなすべしと仰せらるる斯民也三代の聖王御座の時に私曲なくして直道よ

吾猶史之闕文及べり馬有者人よ借て之に乗し今ハ亡夫

○子曰吾猶及史之闕文也有馬者借人乘之今亡矣夫

巧言徳を亂小不忍則大謀と亂

○子曰巧言亂徳小不忍則亂大謀

衆之を惡む必ぶ察も衆之と好む必らむと察も

○子曰衆惡之必察馬衆好之必察馬

人能道と弘ふと道人を弘ふと非ぶ

○子曰人能弘道非道弘人



過らして改めぬ不  
是を過らと謂

五口嘗て終日食を  
不終夜寝不以て  
思益無学一如

君子ハ道と謀て  
食と謀ら不耕を  
飯其中一は在学  
祿其中一は在君  
子ハ道と憂て

貧一と憂不

知之に及仁之と守  
と能ハ不之を得  
と雖も必らざる之  
を失わらぬ  
知之に及仁能之と  
守ハ壯以て之と  
位も不則ら

論語

卷

子

子曰過而不改是謂過矣

過らして改めぬは過らと謂ふ也。然らば改むべきは改むべし。

子曰吾嘗終日不食終夜不寢以思

無益不如學也

終日終夜不食不寢以思、益を得ず、不如學べし。

子曰君子謀道不謀食耕也飯在其中矣學也祿在其中矣君子憂道不

憂貧

君子ハ道を謀るに心を盡し、義理を重んずるに道とハ

身の修め家を齊へ國天下を平らに治る

人の耕と如し、糧を以て田畠に精を出さざるは

なり、諸士たるもの道を心にかけたるは、

ある者ハ、地のつらう用らざるは、天命時節に逢は

ざる如し、耕ととどむ早撤水人の飢饉

その中に自然とあらざるは、そのゆへ君子ハ道を

心に憂て貧を

子曰知及之仁不能守之雖得之必

失之

得ても守らざるは、私欲の心を去らざるは、

欲を去らざるは、仁を以て守らざるは、

能守之不莊以涖之則民不敬

能守らざるは、不莊に以て涖するは、則ち民は敬まらざる也。

論語

卷

子







君事ハ其事  
敬して其食  
後

教有テ類無

道同ト相不  
相為謀不

辭達して已

師冕見少階  
及子曰まはく階  
也席及子曰ま  
はく席也皆坐を  
子之告曰曰ま  
はく某ハ斯在  
某ハハ斯在

師冕出子張問  
て曰く師與言之

○子曰事君敬其事而後其食敬して其君に

己が職分の事あり言責の官たるに心中の忠を吐て  
心より畏む官守ありの其勤を怠るやとや  
これよの心を養て他心を敬むと必しも官位  
をのちるぶその食祿を加増せしめたりや  
その義ハ後へたりして  
よれとて置べし

○子曰有教無類人々を教へて善心にて生る

て教養の善心にさうして生るるこれハ善人之  
これハ悪心ありとその類とをさうしてさう

○子曰道不同不相為謀吾學とると他人

道と同のめとたへえ相至に心にさうしてあはれ  
とりの理りなり相謀りてさうしてさう儒者巫  
祝僧尼されども道  
同トさうの類なり

○子曰辭達而已矣文章ハ志をのづるが象

達してさうして文章ハ條辭達意主客緩急抑揚とて法  
たうとを文章ハ條辭達意主客緩急抑揚とて法  
あはれどりの外なり

○師冕見及階子曰階也及席子曰席

也皆坐子曰告之曰某在斯某在斯

師冕ハ樂人の師として各ハ冕とりの人なり聖人への  
いつとさうして時階とりのものとさうして来れば聖人への  
わけたりとや階とりのものとさうして座席に近づく及び  
くれはさうして座席とりのものとさうして座席に  
さうして坐してくれはさうしてのさうして何某ハ  
にあり何某ハのこにありと告りある目なり何某ハの  
身体を足してさうしてさうしてさうして

師冕出子張問て曰く師與言之

師冕出子張問て曰く師與言之



道與子曰まはく然固まこと相師あひあひ之の道也みちなり

季氏將まさ有あり事こと於に顓臾しゅんお

路孔子見み之を

曰い季氏將まさ有あり事こと於に顓臾しゅんお

乃すなは再また是こゝ過へ也なり

問曰與師言之道與子曰然固相師之道也これれより師し是こゝ退ひ出で也なり

相敬あひあひ之道みち也なり

### 季氏第十六

季氏將伐顓臾冉有季路見於孔子曰

季氏將有事於顓臾三家の季氏顓臾の城を攻伐し

魯の附庸の國の名なりこの時冉有も季路も季氏に仕てあり

爾是過與夫顓臾昔者先王以為

東蒙之主且在邦域之中矣是社稷之

臣也何以伐為

孔子曰夫欲不

之者比自欲之不

能者比自欲之不

危者比自欲之不

曰陳力就列不能者止危而不持顓而

孔子曰求

冉有曰夫子

之欲也吾二臣

孔子曰求







夫是の如く故に  
 遠人服せ不ば  
 則ち文徳を脩  
 て以て之を来せ  
 既之を来せば  
 則ち之を安んじ

今由と求與夫子  
 を相遠人服せ不  
 而して来せ能  
 不邦分崩離析  
 を而して守るを  
 能ハ不

夫如是故遠人  
 不服則脩文徳以來之既來之則安之  
 如是に由りて上下分と守てやまざる時ハ仁義文  
 徳を以て之を來せしむるに  
 今由

與求也相夫子遠人不服而不能來也  
 邦分崩離析而不能守也  
 然るに子路と  
 能はざる有るを以て  
 邦内ハ公室と右四ツに分て各

而して干戈を邦  
 内は動を謀る  
 吾恐る季孫之  
 憂顔史不在不  
 而して蕭牆之  
 内は在

孔子曰まはく天下  
 道有ば則ち禮  
 樂征伐天子自出  
 天下道無まば則  
 ち禮樂征伐諸  
 侯自出諸侯自  
 出さば蓋し十世  
 希して失まハ不  
 希かま大夫自

而謀動干戈於邦  
 内吾恐季孫之憂不在蕭  
 牆之内也  
 その上は干戈を動し  
 謀るに由りて  
 蕭牆之内は公室と右四ツに分て各

孔子曰天下有道則禮樂征伐自天  
 子出天下無道則禮樂征伐自諸侯出  
 自諸侯出蓋し十世希不失矣自大夫出  
 五世希不失矣陪臣執國命三世希不



出さば五世に  
て失ふ不希  
陪臣國命を執  
三世にして失ふ  
不希

天下道有バ則ハ  
政大夫在  
不天下道有バ則  
庶人議不

孔子曰まはく祿之  
公室を去と五世  
政と大夫と遠と  
四世故ゆへ夫  
三桓之子孫微  
なり

孔子曰まはく益  
者三友損者三  
友直と友と  
諒を友と多  
聞を友と  
益なり便辟を  
友と善柔と友  
便佞を友と

失矣

禮樂征伐の事ハりらるん万事の權威天子  
と天下と治平て清く道ありて勢が諸侯に歸して  
り覇者の盛なる時の如く勢が諸侯に歸して  
國法の命を諸侯自專に執りたる時ハ天理に違ひ  
十世を経るハ遂に權威をうくるものなり諸侯  
り政道出る時ハりて理に違ひよとやとて大夫  
倍臣も有りいさななりり倍臣と大夫を見せしめてその  
弥ましく理に違ひゆへ天下有道則政不  
在大夫天下有道則庶人不議

○孔子曰祿之去公室五世矣政逮於

大夫四世矣故夫三桓之子孫微矣

此して宜公を立しより五世を経て大夫三家に  
權威を去るを去りてこれ國家の權威官祿の公室  
を去るなりとて三家の國の政務を奪ひて遂に  
た四世たり又その臣陽虎が爲に權威を去り  
衰へり三家の桓公の子孫なり  
の故に三桓の子孫微なりといふ

○孔子曰益者三友損者三友友直友

諒友多聞益矣友便辟友善柔友便佞

損矣



まろハ損なり

孔子曰まろハ益者  
三樂損者三樂礼  
樂と節小まろを  
樂と人之善と道  
とと樂と賢友  
多まろと樂ハ益  
なり 驕樂と樂  
と佚遊を樂と  
宴樂と樂ハ損

孔子曰まろハ君子  
三侍まろ小三の徳  
まろ有言未及之  
及バ未而して言  
之を躁と謂言之  
及で而して言  
不之を隱と謂未  
顔色を見未  
て而して言之と  
瞽と謂

あつハ正直なり其のを失つて隠さるるを  
友とまろハバ過失あると聞にまろハ二つハ何ぞと  
識とまろハ人交ハ誠の道よまろハ三つハ  
物の理を聞習する人を友とまろハ知明なりまろハ  
まろハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
まろハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
まろハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
まろハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
まろハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ

○孔子曰益者三樂損者三樂樂節禮  
樂樂道人之善樂多賢友益矣樂驕樂  
樂佚遊樂宴樂損矣又損あるもの三つあり  
樂ハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
樂ハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
樂ハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
樂ハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ  
樂ハ三つハ益ある友なり又損ある友とハ二つハ

三つハ吾に賢く友と求て多くまろハ  
これを樂ハ身の益あるなり又損あるもの三つあり  
一ツハ人ハ驕ぶるものまろハ二ツハ酒  
人ニツハ身を佚しとする意でまろハ三ツハ酒  
宴遊樂にまろハ目下なるものまろハ  
行義たるもの窮窟なりといふもの懸なり  
○孔子曰侍於君子有三愆言未及之  
而言謂之躁言及之而不言謂之隱未  
見顔色而言謂之瞽君子の側侍居して  
先方よりいふまろハ言及さる内そつて手  
出さるるを中半りして氣をつけまろハ言  
りてあつてまろハ先方の顔色をまろハ  
まろハ先方よりいふまろハ言及さる内そつて手  
出さるるを中半りして氣をつけまろハ言  
りてあつてまろハ先方の顔色をまろハ  
まろハ先方よりいふまろハ言及さる内そつて手  
出さるるを中半りして氣をつけまろハ言  
りてあつてまろハ先方の顔色をまろハ



ちうの事をと  
つゝ類(たう)

孔子曰君子有三戒少之時血氣未

定戒之在色及其壯也血氣方剛戒之

在鬪及其老也血氣既衰戒之在得

君子ハ心ヲ戒メフコトハ事ニッアリ人二十前後ハ血氣  
の生ラフ時節ナラフもの時ハ一ハヒツト事シラフ在必  
志をくくくもの時ハ四十前後を壯といハ血氣の成  
過てまぐらハ剛なるの時節ナラフ心ハ鬪争の意  
を戒むべし年若クハ血氣衰ラフと云ハ  
老の也ハ諺ナラフと云ハ遠慮ナラフものナラ  
場ハ戒むべしと云ハ

孔子曰君子有三畏畏天命畏大人畏聖

畏る 聖人之言と  
畏る

小人ハ天命と知不  
して畏不大人ハ

狎 聖人之言を  
侮る

孔子曰まはく生  
之を 知者ハ上也  
学で之を 知者ハ  
次也困んで之を  
学ハ又其次也困  
んで而して学  
不民斯と下と為

人之言

君子ハ心ヲ畏つコトニツアリ一ツハ  
天命の眞加と畏奉まつコトニツアリ大徳の

小人不知天命而不畏也狎

大人。侮聖人之言

孔子曰生而知之者上也學而知之

者次也困而學之又其次也困而不學

民斯為下矣

大徳の人ハ目ヲ見テその理と云フ

身ノ行ナシ自ゼんと人の作法と云フこれを生而







齊の景公馬千  
駟有死之日  
民無德而稱  
之無伯夷叔  
齊首陽之下  
餓を民今到  
て之を稱を其  
斯之謂與

論語

卷八

王漢集

○齊景公有馬千駟死之日民無德而  
稱焉伯夷叔齊餓于首陽之下民到  
于今稱其斯之謂與  
齊ハ大國なり景公ハ馬千駟りたる大諸侯たり  
ちのさるる死して後ハ徳の稱べさるる伯夷叔齊ハ世  
をたのしむる首陽山の下にて餓て死す天下の民人今  
よその徳を稱まると事なり誠と人たる者ハ我を  
重くと心を用と多し一車一馬四足なりそれを駟と  
車をとり用と多し一車一馬四足なりそれを駟と  
武王の紂を討つた仁智の聖徳ありて死  
の為誠と天地の明道一疾を諫て死  
ち誠と天朝の大道を守果しつらるる  
子曰誠不以富亦祗以異の句ハ上に出る朱子の  
思め一小子曰の二字をを加へて齊の景公とあり上

陳亢伯魚問  
子曰子亦異  
聞有乎  
對て曰未  
嘗て獨立鯉趨  
て庭と過曰ま  
詩を學子乎  
對て曰未  
詩と學不ん  
て言と無鯉退  
して詩と學

○陳亢問於伯魚曰子亦異聞乎  
伯魚ハ聖人の御子なり陳亢心り聖人なりは御子  
ハハ別御舟一なりと問て曰く子も亦異  
御教を對曰未也嘗獨立鯉趨而過庭  
聞有乎對曰未也嘗獨立鯉趨而過庭  
曰學詩乎對曰未也不學詩無以言鯉  
退而學詩對て曰未也嘗獨立鯉趨而過庭  
詩經を學び得たりと吾對奉つて未なりと  
世の義理をくると人として若詩の徳を知らず  
難しと

論語

卷八

王漢集



他日又獨立鯉趨て庭と過曰まはく  
 禮と學びて乎對  
 學不以て立無鯉退ひて禮と學  
 斯二の者聞陳亢退ひて喜ん  
 得て曰く一を問三と  
 遠又君子之其子  
 邦君之妻君之稱して夫人と曰  
 夫人自稱して

詩とを學他日又獨立鯉趨而過庭曰學  
 禮乎對曰未也不學禮無以立鯉退而  
 學禮聞斯二者抑又獨立趨に此  
 禮と學びて仰あ胸中の徳を仰せ  
 陳亢退而喜  
 曰問一得三聞詩聞禮又聞君子之  
 遠其子也陳亢退ひて喜んで  
 愛詩の徳と又君子ハ其の子を  
 ○邦君之妻君稱之曰夫人夫人自稱

小童と曰邦人之稱して君夫人と  
 曰諸を異邦稱して寡小君  
 曰異邦之人之を稱して亦君  
 夫人と曰陽貨弟十七  
 陽貨見孔子小見孔子其亡時  
 孔子不見歸孔子豚孔子其亡時  
 孔子不見歸孔子豚孔子其亡時  
 孔子不見歸孔子豚孔子其亡時

曰小童邦人稱之曰君夫人稱諸異邦  
 曰寡小君異邦人稱之亦曰君夫人  
 論吾の中御話説の中に何の謂や定  
 聖人の人と御話説の中に何の謂や定  
 邦君の妻者ハ即ち君稱り夫人と  
 小童と稱りの者ハ下の者と  
 君夫人と同く下の者と  
 寡小君と同く下の者と  
 異邦の人の  
 陽貨見欲見孔子孔子不見歸孔子豚  
 孔子時其亡也而往拜之遇諸塗

陽貨第十七

陽貨見欲見孔子孔子不見歸孔子豚孔子時其亡也而往拜之遇諸塗

陽貨第十七



孔子曰謂て曰く  
 来予再と言  
 曰く其實と懐  
 て其邦と迷と仁  
 と謂可乎曰ま  
 不可なり事小  
 従ふと好んで  
 亟く時を失ふ  
 知謂可乎曰ま  
 不可なり日  
 月逝ぬ歳我と  
 與なく孔子曰  
 まはく諾吾將  
 仕んと將

陽貨ハ季氏の臣陽虎なるもの時魯の政道を自  
 專し執つておして猶聖人へまゝして聖人の手をおり  
 奉つらんと欲し陽虎のなり聖人もの色ハ不義の臣の好  
 りバもまゝに陽虎計しをせめぐる一聖人の御亡へ  
 蕪る隙を献しつゝまはれ法としてり一家に在る  
 事あるを以てたう折る謂孔子曰來予  
 吾將仕矣再陽虎の曰くまはれ吾に來て予と  
 曰不可日月逝矣歳不我與孔子曰諾  
 乎曰不可好從事而亟失時可謂知乎  
 與爾言曰懷其實而迷其邦可謂仁  
 事あるを以てたう折る謂孔子曰來予  
 吾將仕矣再陽虎の曰くまはれ吾に來て予と  
 曰不可日月逝矣歳不我與孔子曰諾  
 乎曰不可好從事而亟失時可謂知乎  
 與爾言曰懷其實而迷其邦可謂仁

性相近  
 習相遠

子曰性相近也習相遠也  
 性とい人の生くる  
 この形をうくる  
 始なり聖人の御答誠より予とる不可なりとま  
 同て曰く聖人の國家の政を正さんと成事よあがり  
 従を好まざる予を助るの倒來の時節を失う  
 とりふりゆて一度たうと亟くたうつらる道理を  
 聖人うらみて御答夫もまご予不可なりと陽虎まご  
 曰く日月のうと逝ととやく歳もものよりらる我も  
 人も與同たうと此理つくとありり色ハ聖人諾も  
 仰せありて吾見合ひて國よ仕へ務べくとたう  
 始なり聖人も常人も同じ天地の正気をうくる事  
 して仁義の善徳をそとあるらるりやうをめ小懸高下  
 賢愚のちとが如くたうとまご一様さる依て性ハ人  
 相近とのちとまごも人も年をけて見なる聞あそ  
 て悪も善ふもまをむくとたうをたう習といふ  
 て自然大段のちとて次第に遠ざるうと  
 豈恥らう  
 の



唯上知と下愚與  
移ら不

子武城小之て  
弦歌之聲を

夫子莞爾而  
笑曰割雞馬

論語四

○子曰唯上知與下愚不移上をうけて

ちかく相同じく身のちを習とて又とるなりと

と愚と遠ざかるるを又とるなりと

善道の本の性の善道なるにちかひなきなりと

善道よ志ざり悟知のいらりし知明に上へのなり

愚るる者ハまもる能う吾身をまきて己の理を

解て愚かるるへ下へくととる本ハ処りともりや

上へのなり下へくととる上下隔るるを時ハ遂る

同いぬる此時ハ性の善のハ移るるを

○子之武城聞弦歌之聲子の時御門人

城下の宰を以て教治のいふゆその

武城之の琴瑟を以て教治のいふゆその

夫子莞爾而笑曰割雞馬聖人

用牛刀

用ゆる小及びこの心ハ小なるの城邑を

子曰昔者偃也聞諸夫子曰君子學

道則愛人小人學道則易使也子游

○公山弗擾以費畔召子欲往子路不

說曰未之也已何必公山氏之之也

論語四

三十一

五漢集會齋

を用ん

子游對て曰く

昔偃諸と夫子

小聞曰く君子

道を學べ則ち

小人を愛し

道を學べ則ち

小人を愛し

道を學べ則ち

小人を愛し

道を學べ則ち

小人を愛し



何ぞ必らざるや公山氏小之之

夫我を召者豈徒なるん哉如我を用者有ハ吾其東周と為乎

子張仁と孔子の問孔子曰まぐ能五の者と天下小行なやを仁と為請之と問曰まぐ恭寛信敏恵恭たるは則ち侮とら不寛かれば則ち衆を得信なれば則ち人任と敏なれば則ち功有恵なれば則ち以て人を使は足

公山弗擾とつる者ハ季氏が宰りて陽虎とヤ合せて季桓子を執へば領成の費の人数を備へて畔逆とせしむるを御知をもちつとせんと召徒を召がひりまは聖人も徳と欲めりめり御門人子路之を聞て悦びしめて曰く之事未だ公山氏へ之の事まことに不義の事バ何れ必だ公山氏へ之の事之らんせ

子曰夫召我者而豈徒哉如有用我者吾其為東周乎

聖人御答に及ばざるん今我を召と豈徒づらんや我示とらを用なば吾の周の徳のさるんや如く徳を東がらむらめんとせらるんや聖人の心ハ國の徳と民の徳とを憂ふ且また過らるるを改めぬ人もたれものゆるく仰せらるる先づつて衛子にまると公山氏へ之とせらるる聖人仁心のたれ別の義なるこの事ハ東瀝

先生博論の書

○子張問仁於孔子孔子曰能行五者於天下為仁矣請問之曰恭寛信敏恵恭則不侮寛則得衆信則人任焉敏則有功恵則足以使人

子張を天下の人へ施し地をなすは仁とつる身子張を以て請て問をまはる御ちとつる身恭しく言語振舞みぐるを事し敬を心して用ひ色ハ人侮とらる二ツハ心もちく何れを事し敬を寛たるとりあつて早速にの事を仕歸るを得たりニツハ違とな信を守らん事なを任まらる四ツハ怠らして早速にの事を仕



佛肸召子往欲

とんいんを使し手足の如し

諸を夫子小聞

○佛肸召子欲往子路曰昔者由也

曰はく親く其

聞諸夫子曰親於其身為不善者君子

身為於不善

不入也佛肸以中牟畔子之往也如之

不佛肸中牟

何 晋の大夫佛肸己城下中牟の人数と徒黨とより謀謀をたくと聖人を召待して御智とわんと

以て旺く子之往

強人なる故に悦ばざりて曰く昔日夫子の御詞も

之を如何

欲りのたす時よ取王人往しと許り子路ハ義勇の

然是言有堅

如何なる 子曰然有是言也不曰堅乎磨

曰不乎磨

而不磷不曰白乎涅而不緇 御然然

不白と曰不乎

涅 是言のどく

涅して緇不

吾豈匏瓜也哉 馬能繫而不食

吾豈匏瓜

吾豈匏瓜也哉 馬能繫而不食

馬之能繫

吾豈匏瓜也哉 馬能繫而不食

食之不

吾豈匏瓜也哉 馬能繫而不食

由女六言

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰

未也居吾女

未也居吾語女 由を召りて女六言の言に六の蔽ありとて之を聞けり

語人

不口やとつりしを子路未けり 吾語せりて聞けり

由女六言の六蔽

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰

未也居吾女

未也居吾語女 由を召りて女六言の言に六の蔽ありとて之を聞けり

語人

不口やとつりしを子路未けり 吾語せりて聞けり

由女六言の六蔽

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰

未也居吾女

未也居吾語女 由を召りて女六言の言に六の蔽ありとて之を聞けり

語人

不口やとつりしを子路未けり 吾語せりて聞けり



仁を好んで学ばず好まば其蔽愚なり  
 知と好んで学ばず好まば其蔽蕩なり  
 信と好んで学ばず好まば其蔽絞なり  
 勇と好んで学ばず好まば其蔽剛なり  
 直と好んで学ばず好まば其蔽蕩なり  
 子何ぞ夫詩を学ばず莫

好仁不好學其蔽也愚  
 好知不好學其蔽也蕩  
 好信不好學其蔽也絞  
 好勇不好學其蔽也剛  
 好直不好學其蔽也蕩  
 子曰小子何莫學夫詩

子曰小子何莫學夫詩

取五人あり何ゆへ夫詩を学ばずなりハと仰せり  
 小子ハ御門人のこと詩經の徳左の如し

詩以て興る可以て觀可以て羣  
 事之を遠く君多し鳥獸艸木之名を識  
 子伯魚謂て曰はく女周南召南を為し乎人にして周南召南を為し其正しく面牆して立ぐ猶と與

詩可以興可以觀可以羣可以怨  
 事父遠之事君多識於鳥獸艸木之名  
 子曰伯魚曰女為周南召南矣乎人而不為周南召南其猶正牆面而已  
 與

家をも齋するも至近ある二南の義理を為さるる  
 たとへば牆壁に立向うて歌の姿を見らんとするが







を得ると患既に  
小之を得ば之を  
失かりて患苟に  
之を失かりてを  
患をば至ら不所  
無

古へ民二三の疾  
有今ハ是或と  
七

古へ之狂ハ肆  
今之狂ハ湯  
古へ之矜ハ廉  
今之矜ハ忿  
直今之愚  
詐りる已

巧言令色鮮  
仁

之也患得之既得之患失之苟患失  
之無所不至矣  
鄙劣なる夫ハ相與りて君に事へ  
りて死にハ富貴を得ずとの心は  
得ずると死ハ又之を失ふんを患  
之を失ふことを患ふ心は  
のかりとを室先生の言ゆり人  
徳に志する人ハ名のりて名  
心をもつらんと事するこれハ上  
然んと稱ぶるものハ財宝官録  
心をもつらんと事するこれハ上  
名とに志する人の人ハり志を  
貴べ心を動さんよる起す  
るる弱を人のことなりと仰

子曰古者民有二疾今也或是之亡  
古の世に其疾は是亡と云ふ  
也古者の民ハ小偏なり心ニ  
今の世に其疾は是亡と云ふ  
古之狂也肆今之狂也湯古之矜  
也廉今之矜也忿戾古之愚也直今之  
愚也詐而已矣  
古之りの狂ハ肆  
和語のありしなりと云ふ  
古之矜ハ廉  
和語のありしなりと云ふ  
今之愚ハ直  
和語のありしなりと云ふ  
今之愚ハ直  
和語のありしなりと云ふ

子曰巧言令色鮮矣仁  
巧言令色鮮矣仁  
仁ハ略



紫之朱と奪  
惠む鄭聲之雅  
樂を乱るを惡む  
利之邦家を  
覆へむ者を惡む

○子曰惡紫之奪朱也惡鄭聲之亂雅樂也惡利口之覆邦家者

朱ハ正しく赤らるる色を奪ハ紫なり其正しくぬしを心みくし又鄭聲の樂ハ淫乱なり雅樂の妙をさぐるんとし其をさぐるは又國家の治法政道と利口ふまをせて人の耳をめくさるるなり

○子曰予欲無言

予言と無んと欲を  
子貢曰く子如言不バ則ち小子何と述ん子曰

小子何述焉子曰天何言哉四時行

焉百物生焉天何言哉

とやうくバ小子の輩に何の徳をり述べんやと聖人の仰ありし心ハ天道ハ何を言ふ所の四時行を明の妙道おのづから流行する所まじ四季の時節をさぐるは百の物各々生育するは誠なる仁の大徳一動一靜も天理に

○孺悲欲見孔子孔子辭以疾將命者

罪を聖人に得たことのあるは折しも聖人に謝罪する人と来りしを辭退し疾を以てその命を將するの戸を出てしを孺悲にのりし時とて其がしに聖人琴を取て歌ふ誠の

孺悲孔子小見へんと欲し孔子辭以て疾を以て人年を將する者戸を出て琴を取て而して歌ふ之を聞使



宰我問三年之喪期已久矣

君子三年礼を為す礼必り壊さる三年樂を為す樂必り崩壊す舊穀既り没新穀既り升る燧を鑽て火を改むる期ふして已可

疾して、たがひを示し一聞しめく其逢ざる所以をゆへるやう

○宰我問三年之喪期已久矣

君子三年不為禮禮必壞三年不為樂

樂必崩舊穀既没新穀既升鑽燧改

火期可已矣

子曰食夫稻衣夫錦於女安乎曰安

居巷食旨不甘聞樂不樂居處不安故

不為也今女安則為之

宰我出子曰予之不仁也

宰我出子曰予之不仁也

夫稻を食し夫錦を衣し女は安んず

女安んず則ち君の樂を聞て樂ま

不居處安んず不

故に女安んず則ち

宰我出子曰予之不仁也







義以て上と為  
君子勇有て義  
無色ハ乱を為小  
人勇有て義在  
ハ盗を為

子貢曰く君子  
亦惡と有乎子  
曰まハく惡むと  
有人之惡と稱  
まら者と惡む  
下流に居て而  
て上を誦る者  
を惡む勇は  
而して禮を  
を惡む果敢小

為上君子有勇而無義為亂小人有  
勇而無義為盜子路始て御人とならるる勇  
同奉まらるるハ君子も勇  
氣を尚りて宜しと聖人御發し人ハ貴賤となく  
義理をとりとくは君子勇の事を好て義を輕

○子貢曰君子亦有惡乎子曰有惡惡  
稱人之惡者惡居下流而誦上者惡勇  
而無禮者惡果敢而窒者子貢問奉まらるる  
ハ君子の徳ハ  
寛仁と御發元より君子も惡とあらるる其の  
ハ二ツハ人の身の上の惡を嚆を稱しを好  
ハ下流に居るる上を誦めらるるハ勇氣と重

禮法を輕むるのつらハ我々竹簡をよりて  
人々相謀む能く果敢て外々の異慰を窒との  
あつらむらハくも、  
よのぞし仰せらるる、  
曰賜也亦有惡乎惡微  
以為知者惡不孫以為勇者惡訐以  
為直者子貢ハ亦惡とありやと御大づひ  
あり子貢ハ亦惡とありやと御大づひ

して而して窒  
者を惡む  
曰まハく賜も亦  
惡と有乎微て  
以て知と為者  
惡む不孫にして  
以て勇と為者  
惡む訐して以て  
直と為者と惡む

唯女子と小人與  
養なむ難と  
為之を近と

○子曰唯女子與小人為難養也近之  
有ムハ人の心よつとわくハ世の中のあるは  
とを探しを伺ひ知てを言ひ知日と  
附合ハ人らして之を逃避するを以て己が勇と  
有ムハ人の心よつとわくハ世の中のあるは  
とを探しを伺ひ知てを言ひ知日と  
附合ハ人らして之を逃避するを以て己が勇と  
有ムハ人の心よつとわくハ世の中のあるは  
とを探しを伺ひ知てを言ひ知日と  
附合ハ人らして之を逃避するを以て己が勇と







孔子曰まはく殷  
は三仁有

時ハ國々く治るる武王天下の為  
紂を亡ちし伯夷はまを暴悪たること  
孔子曰殷有三仁焉 聖人常に仁をゆる  
るに義とらばして仁とのめふと君臣の大  
を重とと  
とるにこの篇をよむ者實に 天朝自然の明  
道異邦比を  
敬畏まぶしと

柳下惠士師と  
為三黜をけらる

○柳下惠為士師三黜人曰子未可以  
去乎曰直道而事人焉往而不三黜枉  
道而事人何必去父母之邦 柳下惠ハ古の  
賢人なり君に  
仕て三黜め黜らる又三黜め出されけりその  
黜るる時ある人のいけりハ子の賢徳ありるが  
外して用らるごとて國をさるるざらハ理を柳下  
とるてしやうハ中々然るべう今日直の道と以て

人の曰く子未以て  
去可う未乎早  
道と直くして人  
事ハ焉は行そ  
て三黜ナラハ不  
人道を狂て人  
事ハ何ぞ必と

父母之邦を去ん  
齊の景公孔子と  
待て曰く季氏の  
若ハ則ち吾能  
ハ不季孟之間を  
以て之を待人曰  
吾老と用ゆる  
と能ハ孔子行

人ノ事するのハ大て何の國りても去らざらうとの  
もて道を狂て事らるるとならハ何ゆへハ父母より生を  
さるるの君の國を  
さるる道と

父母之邦を去ん  
齊の景公孔子と  
待て曰く季氏の  
若ハ則ち吾能  
ハ不季孟之間を  
以て之を待人曰  
吾老と用ゆる  
と能ハ孔子行

○齊景公待孔子曰若季氏則吾不  
能以季孟之間待之曰吾老矣不能  
用也孔子行 聖人齊の國に在て齊の君景公  
臣下へ仰あうるハ魯國の上卿季氏が如く成盛るる事  
して聖人を迎へるとも能不季氏と下卿子西氏との  
間を以て聖人を迎待べしとらる然るも吾も年老  
とるる用ゆるも知れず其後齊を去らる

父母之邦を去ん  
齊の景公孔子と  
待て曰く季氏の  
若ハ則ち吾能  
ハ不季孟之間を  
以て之を待人曰  
吾老と用ゆる  
と能ハ孔子行

○齊人歸女樂季桓子受之三日不  
朝孔子行 齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

○齊人歸女樂季桓子受之三日不  
朝孔子行 齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

○齊人歸女樂季桓子受之三日不  
朝孔子行 齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行

○齊人歸女樂季桓子受之三日不  
朝孔子行 齊人女樂を歸  
季桓子之を受  
三日朝孔子行











體勤不五穀分不  
孰とて夫子と為其  
杖を植て芸さる

子路拱して立

子路を止めて宿

を雞を殺し黍

を為して之を

食せしむ其二子

を見へしむ

明日子路行て以

て告子路曰まはく隱

者也子路を使反

て之を見を則

ハハ行

子路曰く仕へ不ハ

義無長幼之節  
廢可う不君臣  
之義之を如何其  
之を廢せん其身  
を潔ざらむせん

欲して大倫と乱  
君子之仕る其義  
を行なふ道之行  
まはく不己之と知  
逸民ハ伯夷叔齊  
虞仲夷逸朱張  
柳下惠少連  
其志ざしを降さ  
不其身を辱す  
しめ不ハ伯夷叔齊

四体を五穀世りて勤を耕りて世に遊  
のハ孰り夫子とせんとして杖を田地に植て死して  
州芸をさしめてぞ  
子路拱而立子路もその儀を  
左右の臂をさしめてこれらぎの礼なり  
殺雞為黍而食之見其二子焉隠者子路を  
講待し己が宿へ伴らひて一宿しめ家雞黍の料理  
をさしめめちるひりう二人の子を子路ためてこれ  
長教をさしやまふ  
の礼なり

者也使子路反見之至則行矣  
御宿へまうこの体を告奉りつる聖人御仰せにこそ  
隠者なりとありて子路を反して見せむありしや  
茲行て君子路曰不仕無義長幼之節不  
あはさる

明日子路行以告子曰隱

者也使子路反見之至則行矣

御宿へまうこの体を告奉りつる聖人御仰せにこそ

隠者なりとありて子路を反して見せむありしや

茲行て君子路曰不仕無義長幼之節不

あはさる

可廢也君臣之義如之何其廢之欲潔

其身而亂大倫君子之仕也行其義也

道之不行已知之矣

者となりて世に仕るハ君臣の義をさしやまふと  
ちるも二二人の子を我に敬して見しむこれ長幼の節を  
廢ざらむ却て君臣の大道を如之何や己身を潔く  
せんとて大なる倫を乱しハ何ぞぞ君子の士は仕とら  
ふ其義を重んずるなりやの時節となるや  
道の行なふことと己に知るべきとかなり

○逸民伯夷叔齊虞仲夷逸朱張柳下

惠少連

子曰不降其志不辱其身伯夷叔齊與

逸とハ世に用らるるをさしやまふ逸とハ民と

義なりその人あつて七人なり

子路曰く仕へ不ハ

義無長幼之節

廢可う不君臣

之義之を如何其

之を廢せん其身



與柳下惠少連

志也言倫乎中

行也慮乎中

其斯已

虞仲夷逸を謂

を放ち身清

中と廢權中

我則は是

異なり可も無

謂柳下惠少連降志辱身矣言中倫行

中慮其斯而已矣聖人評し二人の伯夷叔齊の

志を降して身を辱せんとする人々の柳下惠少連の二人の志を降

して身清く義理を以てして自ら清く人々の

謂虞仲夷逸隱居放言身中清廢中權

の二人の隠居やとらうて我放言をうけ自ら

の清くは清らかに世の風俗を廢して自ら清く

無可無不可自曰我是徒輩とハ異風

仰ヒラセ

大師摯適齊亞飯干適楚三飯繚

適蔡四飯缺適秦鼓方叔入于河播鼓

武入于漢少師陽擊磬襄入于海

此段ハ聖人の御評し右の隠居を評し

同ト隱居やとらうて世の有るを見て

○周公謂魯公曰君子不施其親不使

大臣怨乎不以故舊無大故則不棄也

無求備於一人魯國の御先祖周公御子伯禽

かくの如く怨む君主の仁と知るとして

論語四

三十一

論語集注

大師摯適齊亞飯干適楚三飯繚  
四飯缺適秦鼓方叔入于河播鼓  
武入于漢少師陽擊磬襄入于海  
周公謂魯公曰君子不施其親  
不使大臣怨乎不以故舊無大故  
則不棄也















子夏曰大德不踰閑小德出入可也

子游曰子夏之門人小子洒掃應對進退當

之則人小子洒掃應對進退當

○子夏曰大德不踰閑小德出入可也

此段よく意得ば人々善にまじむるを知べしこの心ハ大徳なる事に法にうちまじむるを踰出てくまらざる事なるべし小徳なる事ハあまじむるを出入せざる事なるべし

○子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑末也本之則無如之

何洒掃應對進退の容貌をいふとハ可なり是ハ

小學の誠意正心と本之とをいふと然るんこの事の

子夏之を聞て曰く噫言游過矣君子之道孰先傳

傳孰後倦馬譬諸州木區以別矣君子之道焉可評也

有者其惟聖人乎

君子人をして先へ好んで傳ふるも亦たなくまづ本にちとるべきを倦りて後示すは君子の教をいふとつきの理はたとへば草木の長と短とを區の差あるが如く大と小とを區にして

高遠なる場を祭して道引べし必不能おちに至理に誣るるハ唯聖人の事なるべし



子夏曰仕而優則學。學而優則仕。

子游曰哀哀親の喪を致して止

子游曰吾友張能難為然未

曾子曰吾聞諸夫子小聞人未自致者有未必親之密乎

○子夏曰仕而優則學。學而優則仕。

○子游曰哀哀親の喪を致して止ハ社のこころん於

○子游曰吾友張能難為然未

○子游曰吾友張也為難能也然而未

○曾子曰堂堂乎張也難與並為仁矣

○曾子曰吾聞諸夫子人未有自致者

也必也親密乎

○曾子曰吾聞諸夫子孟莊子之孝也

其他可能也其不改父之臣與父之政

是難能也

○孟氏使陽膚為士師問於曾子曾

允士の世に出レつりつらハその志を行

親の喪を

能難

仁

曾子評

也必也

親の密に心を

孟莊子ハ魯の大夫

是難能也

孟氏使陽膚為士師



上其道と失かふ  
て民散と久  
し如其情と得  
則は哀矜して  
喜ふ勿

子貢曰、紂之不  
善たる是の如く  
甚とて、君子ハ  
是を以て、君子ハ  
下流ニ居るを思む  
天下之悪皆馬に  
歸す

子貢曰く、君子之  
過まら、日月之食  
の如く、過まら、人  
比之を見、吏と  
むる人皆之仰ぐ

衛の公孫朝、子貢  
小問て曰く、仲尼  
馬を學ぶ

子貢曰く、文武之  
道未だ地ニ墜  
人ハ在賢者ハ其  
大者不賢者ハ其  
識其小者莫不有文武之

子曰、上失其道、民散久矣。如得其情、則  
哀矜而勿喜。孟氏ハ魯の大夫なり。曾子の御弟  
子陽、膚を士師の官にめり。か、

士師ハ詭謀決断を司るなり。あつるに陽膚  
士師の官を道と問奉る。曾子の御弟、當時上  
る者、道をとて、不仁不義して、政道をとり、行  
かゆ。民塗炭とて、むり、斃に用ひ心を怒て  
治めらば、民若きをよめ、つとて、人情を  
得べし。哀矜して、岳能こと喜ぶとて、さる

○子貢曰、紂之不善、不如是之甚也。是  
以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。

子貢批判、殷の紂王を見、大惡逆、勿論、さる  
あつるに、え来、如是、甚とて、惡心、さる、  
惡逆長、さる、さる、さる、さる、さる、さる、  
さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、

以て君子の人ハ、地、下流のあつる、場、に、居る、を、思、む、  
天下之惡、皆、馬、に、歸、す、

○子貢曰、君子之過也、如日月之食焉。  
過也、人皆見之、更也、人皆仰之。

又曰く、君子ハ、過を、あつる、さる、さる、さる、  
て、改む、さる、さる、さる、さる、さる、さる、  
さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、

○衛公孫朝問於子貢曰、仲尼馬を學ぶ。  
衛の大夫、孫朝、の、曰く、取王、人、馬、の、た、ま、  
大徳、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、

曰、文武之道、未墜於地、在人。賢者識其  
大者、不賢者識其小者、莫不有文武之



者此識也文武之道有不亡莫

叔孫武叔大夫朝語曰子貢仲尼也賢者子服景伯以子貢告子貢曰

室家之好也窺見夫子之牆ハ數仞其門也

道焉夫子焉不學而亦何常師之有

子貢の答文王武王仁義の道今の世に於ても其に及びりて墜るる者も賢者として其の徳の大成する者も識者として不賢者の人ハ徳の少者なり其の徳を識るる大小ともに文武の道なり其の徳の大成する者も識るる者も

○叔孫武叔語大夫於朝曰子貢賢於

仲尼 魚の序子貢の徳を稱して取主人より賢るる

子服景伯以告子貢子貢曰

宮牆賜之牆也及肩窺見室家之好夫

子之牆數仞不得其門而不見宗廟

之美百官之富 景伯の答ありけるハ至極なる事也

又取主人の牆壁ハ數十仞あり其門ハ入て

得其門者或寡矣 官位のるるも其の富なるも其の徳の大成する者も寡なり

夫子之云不亦宜乎 宜しき事也

○叔孫武叔毀仲尼子貢曰無以為也

仲尼不可毀也他人之賢者丘

不毀也 他人の賢者ハ

不毀也 他人の賢者ハ



















謂子曰謂曰曰ままははくく教教へへ  
 不不ししてて殺殺ままをを之之をを  
 虐虐とと謂謂戒戒めめ不不しし  
 てて成成をを視視之之をを暴暴  
 とと謂謂命命とと慢慢とと期期とと  
 致致ままをを賊賊とと謂謂  
 猶猶くく之之人人とと與與出出しし  
 納納之之文文口口口口口口之之  
 とと有有司司とと謂謂

命命をを知知不不ババ以以てて  
 君君子子為為とと無無礼礼とと  
 知知不不ババ以以てて立立とと無無  
 言言をを知知不不ババ以以てて  
 人人をを知知とと無無

論語卷之四終

冠冕を正し瞻視を尊く威儀を儼然として人より畏れし威あり猛りとしてさうにたり又四悪を説く國を治むるの人下々の民も義理をこころみ政道を示しあつて必るに法度ありさうのよう罪と犯すのありそれを殺すと虐とり又教戒とこと手前さうしてつひのちく邪悪を成しむるこれを暴といふ又上の嚴命を慢とて遂ぐ其咎の期と致すこれを賊と云猶之して人に物をほろろるその中として出納の吝をゆるはれを有司風とりあはる

○子曰不知命無以為君子也不知禮無以立也不知言無以知人也

身の吉利と凶害と自然の命分として定あつて愉快快悔をいふことと理あるこの命と知れば君子とありやとて礼法をいふして人道をいふ言の用べき用やとてこの理りをいふといふ人の取正を知とあはるやとてさうなり



